

座談会

漢文教育の現場から

——昭和五七年度改訂を前にして——

出席者（五十音順）

謡口 明（東京都立国立高校教諭）

加藤 章（栃木県立栃木高校教諭）

金子彰男（新潟県教育庁指導主事）

野地安伯（神奈川県立湘南高校教諭）

司会

伊藤 虎丸（編集部）

記録

松谷 格（自由が丘学園講師）

時：一九八一年四月五日（日）午後

所：東京女子大学伊藤研究室

日曜日の午後、構内の満開の桜に背を向けて、狭く薄暗い研究室で、熱心に討議に参加して下さった諸兄に、まず感謝したい。とりわけ、その朝の汽車で新潟から駆けつけて下さり、会が終るなりまた上野駅に直行してトンボ返りで帰られた金子会員には、

字義通り「有難い事」だったと言う外に感謝の言葉もない。編集委員会にとって、こんなに励まされたことはないということだけを最初に申し上げて御礼に代えたい。

参加依頼は、田部井会員に御相談し、実際は全て筑波大の向島会員にお願いした。日程の折合いのつかなかった会員も多く、向島さんに大変ご苦勞をかけた末、結果的には所謂「名門校(?)」ばかりが集まることになったが、日時の都合もさることながら、勤務校によっては、とても、漢文教育を考えるなどという余裕はないといった状態にある会員も少くはないということもあるのではなからうか。そうしたことも、私たちの会にとって見過すことの出来ない問題の一つであるかも知れない。

四百字詰百五十枚に及んだテープからの原稿起こしが何んとか間に合ったのは、松谷格氏（和光大学卒業）の献身的な協力のお蔭である。とくに記して謝意を表したい。

※

※

※

司会 今日とは本当に有難うございました。電話や何かでご連絡

しましたように、今回は、一つには、前回の座談会（前号所載）のメンバーより少し若い世代の会員にお集まりを願って、前回に出された意見を発展させるためにも、あれに対する皆さんの現場経験からのご批判なりご意見を頂きたいということ、二つには、そのことと関連して、（今号には漢文教育に関する論文や実践報告を寄せて下さる会員がなかったということもありまして、皆さんが教室でこんなことをやっている、やってみた、というご経験をご紹介頂けたら、というのが趣旨です。

最初にまず自己紹介を兼ねて、今感じてもらえる問題をそれぞれに出して頂くというところからポツポツ始めてみてはどうでしょう。

野地 じゃあまず長老から（笑）

金子 はじめ、向島君から話を聞いた時には僕は若い方が出る



金子氏

んだろうと思っていたら、僕が一番上だって言うんでしよう。こりゃあ、承知するんじやなかったなあと思っただけだ……。今回行政の方に移って一応現場を離れたような形になったんだけど、ついこの間までは、新潟高校にいまして、やっぱり改訂後の国語Ⅰ・Ⅱ、或いは古典の中で漢文をどういう風に扱っていったらいいのかなというようなことを、ずっとまあ

気にして来たわけです。新潟高校という所は、どちらかといえば進学を中心とした学校なんですけど、そういう所で、他のものも教えていましたけども、主として漢文を担当しておりました。

司会 四月からは？

金子 えーと、新潟県教育庁高校研究課指導主事です。

野地 私は、三十八年に卒業しまして、直ぐ母校にいきまして、十四年間やりまして、それから湘南高校の方に四年前に転任しました。まだ二校しか歩いてませんけども、どちらも、神奈川県下では、受験校ですから、そういう経験しかないんで、今日も、幅広い見地からということとは言えないんで、お役に立ちますかどうか……。

謡口 私は、ちょうど、野地さんが四年の時に一年だった様ですね。私は、一つの学校に長くいるということがあまり出来ない性分です。一番最初伊豆七島にあります三宅高校に三年居りまして、それから、多摩地区にあります都立府中高校に移りまして、そして現在国立高校という風な形で来ています。現在の学校では、お前は漢文をやって来たんだろう、というような事で、毎年三年生の選択の漢文と、それから二年生の週一時間の漢文の授業、これだけは絶対必ず持たされまして、あと残りは現代国語をもたされています。

昨年度、東京都の教育開発委員会という会に参加いたしました、五十七年度からの、国語Ⅰ、改訂に伴う授業展開をどうしたらいいのか、という様な事で、いろんな学校の方と話し合いをしたせいもありまして、今日の話し合いの中で、これからどうい

風にやっていったらいいのか、という様なことをもう一度改めて考えさせて頂きたいと思つて居ります。

加藤 今は栃木高校におります加藤です。私は四十三年の漢文



加藤氏

科卒業、ちょうど謡口先生が三年生の時、私が一年生でした。今の高校は三年目でして、振り出しが工業高校、その次が男女共学の普通科、そして女子校、現在が四つ目の高校で非常に多種多様な生徒を扱つて来ま

した。今の学校は、私の母校ですし、まあ栃木県内では進学校として一応名は通つてゐるんで、一応まともな国語教育が出来るんじゃないかという風に考えていたんですが、実際的にはまあ漢文を教えるといつても、ほとんどありませんで、全教員が、現国、古文、漢文全部をやるという形になっていますから、漢文をやるにしても、週四時間が限度なんです。そんな中で、自分は漢文教師だなんていうことはとても言えない様な形ですし、常々国語の力をつけるために、という形でやっていますので、特にあえて漢文教育を、ということとは私自身はあまり考えたことはないんです。私の同窓の友達なども方々に散らばっていますが、漢文だけやってゐるっていうのはごく少ないんですね。まあそういうことで、地方というところは教科全部をやらなきゃならないんで、漢文だけという事は一寸意識しにくい面もありますし、最近余り勉強もし

ていないので、これを機会にまた、もう一度勉強し直したいと思つて参加させて頂きました。——中略——

司会 それじゃあどうでしょうかまず謡口さんに、東京都開発委員会とやらでの問題になったことからでも、口火を切つて頂いては……。

#### 東京都教育開発委員会が出た問題

謡口 そうですね。問題になりましたのは、生徒の漢文に対する興味関心、理解度といったものが学力差を含めて学校によって大きく分かれてゐる。そういう学校差によって幅の出来た生徒に對して、どう対処して行くのかという風な問題。段階別学習というようなことが一面に言われている訳です。生徒の側で言うと、そういう事がありまして、それから国語科の中にあつて、高等学校で漢文をどの程度まで教えていけば良いのかという問題。一方では大学入試問題なんか見ますと、これは、やつてはならないはずのことですけれども、白文を書き下し文にしなさいという風な形の出題がされている。——選択肢を用いた問題ではあるんですけども、そういう形で白文が読めるぐらいの読解力まで要求するといふ、そういうことが一方ではある中で、一方では漢文について全く興味を持ってない生徒がかなりゐる。そういう生徒にどうやつて関心付け、動機付けをして行くのが問題になっている。そういう点から、高等学校に於いては、どのぐらいの到達目標を持つてやればいいのかということが問題になりました。

一寸話が長くなりましたけれども、昭和四十二年に、今、大妻女子大に出てらっしゃる大木（春基）先生が、付属高校におられ

た時に、大修館の『漢文教室』に「漢文の入門指導に因んで」という標題で書いていらっしやるんですが……。

司会 『漢文教室』の何号ですか。

謡口 えーと、八十一号、昭和四十二年五月号です。実はです



謡 口 氏

ね、これは、中学の生徒の古典指導についてお書きになってるんです。ところが、ここで大木先生が中学校の生徒に向けて入門指導をどうするかという風に提案なさった事柄が、現在ではそのまま我々が高等学校でどうしなければならぬという問題に置きかえられるわけです。つまり、漢文についての取り扱いが、言い方が良くないかも知れませんが、レベル的に、或いは質的に相当低くなっていると言えらるんです。一寸まとめ切れませんので、けれども、まず最初の段階として三つぐらいの事柄が……。

司会 その辺のことは、高校だけじゃなくて、もう大学の現実にもなりつつあるという感じがですね。

謡口 さんのお話は、第一に、まず生徒の問題から学校差の問題が出て、第二は、国語科の中で漢文をどの程度やるかっていう到達目標の問題、それから……。

謡口 その質的に、取り扱う材料が、以前のものに比べて非常に低くなって来てるんじゃないだろうかということ……。

司会 つまり教材問題と言っているんですか、三番目は。

謡口 そういう事ですね。教材の問題ですね。

生徒の問題、学校差など

司会 学校差っていう問題になってるんですね、この頃は。つまり、昔は、クラスの中で生徒の学力差が大きな問題だったんだけれど、近頃では、都立の場合なんか中学から高校に行く時、内申と偏差値で何段階にも、それこそ薄く輪切りにしちゃうでしょう。

金子 僕はそっちの方が大きいと思うんです。学校差、中学間の学校差と言うよりは、生徒のレベルの問題がやっぱり大きいんじゃないかと思うんですけれどね。まあ僕はどちらかって言うところの方をずっと扱って来ますんで、下の方は、よその学校の先生から聞くぐらいで実際のことはよく判らないんですけどもね、たとえば、数学だと、分数を高校に入ってから初めて見たっていうような言い方をする生徒があるという話で、そういうのが高校に入ってから来る訳ですね。僕は、それを実際に教えた経験がないもんですから、あまり……。

司会 去年のこの座談会の時にも、佐々木さんでしたか、新設校に移られてから大変だという話をしておられましたね。

金子 生徒を退屈させないというだけで精一杯だ……。

司会 その辺は加藤さんはどうなんですか。色々な学校で教えられたということでしたか……。

加藤 そうですねえ、やはり女子生徒と男子生徒ではかなり違いますね。女子校・男子校色々やってきまして、やはり生徒の多

様化というのがありますから、本質的な女子と男子の違いっていうものを、私自身考えてやって来たつもりなんです、どちらかと言えば女子の方が、やはり、何て言うか、文学としてやる場合（漢文も国語の一部ですからね）好き嫌いは別として、授業としては、割合やり易いです。と言うのは、こちらの言うことを一応まともに聞いてくれますし、興味を持ってくれます。今の高校は一応いいんですが、国語科の教員でどうしても、数学や英語の先生に遠慮しているんですよ。気が付くと、自分の国語だけ一生懸命やらせたいんだけど、何となく生徒が可哀そうになってしまっただけ。私自身何て言うんですかねえ、とにかく授業で覚えてくればいいことを中心にやってまして、いわば最低限授業で、総て終わりにしてしまいう形に、なっているんです。一番大切なことは何かと言うと、私はやはり漢文の教科書がすらすら読める様になってほしい。そういう最低目標を一応作る訳です。教科書がすらすら読める、完全に読める。そこに一番基本を置いてやっているんです。今の所、そういうことで、これから段々に要求するつもりなんですけども……。

#### 入門指導を考え直す時ではないか

金子 いま話口君から教材が質的に落ちているんじゃないか、という様な話が出たんですけどもねえ、去年僕は、一寸関係があって中学の新しい教材を調べてみたんですが、内容的にはね、昔の物よりも質的に落ちているとは言えないと思うね。量的には確かに少くなっていますけどね。たとえば中学三年生になると論語が中心ですが、これが今まで高等学校で扱って来た教材とまった

く同じ物で、ただそれに書き下しとか、或いは語釈とかが付いている。だから質的に落ちたという見方を僕はしない。ですから、少なくとも僕が扱って来た生徒について言えば、従来の漢文入門的なものが、逆に漢文嫌いを作っている要素が強いと僕は思っているんです。

#### 司会 最初の入門の仕方ですか。問題は。

金子 はい。要するに断片を並べて返り点の付け方、送り仮名云々と言うのをね。それだけで何時間も取るっていうのが、逆に漢文なんて何んだという感じを生徒の中に作り出しているんだろうと思うんです。その辺のことは田部井さんが『漢文教室』あたりですでに随分言っていることなんですけども、とりわけ、教科課程の改訂のたびに漢文の時間がますます少なくなる中で、入門編の扱い方を大幅に変えて行くことが、結局漢文で生徒を引っぱって行く条件になるんじゃないか。いろいろな生徒がいますから一概には言えませんが、少なくとも私が扱って来た生徒について言えば、そう言えるんじゃないかと思えますねえ。新しい教科書を見てみましても私は白表紙を一冊見たんですけど、相変わらず従来通りの編集をしていますね。これはもう根本的に変えなきゃいけないところに来てるんじゃないか。

野地 どうですか、その返り点、送り仮名云々ということですけどね、私は金子さんとはまた少し違った感じを持つるけども……。生徒は形式面での興味を示しませんか。

金子 高校一年、十五でしょう。ある意味じゃ相当大人になっているわけですよ。しかも中学で三年間やって来てるでしょう……。

野地 でも、やって来た様には見えないけどね(笑)。ただ、



野地 氏  
今、教科書のようなやり方で「形」を教えてね、生徒にやらせても、結構最初は興味を示すんじゃないんですか。

金子 それよりも「またか」という感じの方が強い

んじゃないですか。だから……。

野地 そうですかねえ、私は、生徒は興味持つてるように思うんですけどね。ただ、それをあんまり長くやってると、金子さんのおっしゃった様に飽きがきちゃうんで……。

金子 だからね、かえって、白文なら白文をいきなり黒板に書いて、これ、どう読むんだ、というような形でもって行くんならいいですよ。相変わらず、返り点、送り仮名付いたのを出して書いて書き下しを下に付けておいて、さあ読んでごらんでしょう。そして、試験になるとそれを外して、入れられるかどうか、というようなことを逆にやる訳でしょう。何んかねえ、発想変えなけりゃいけないんじゃないかと思うんですよ。

野地 まあ、教科書そのままの順でやってると、そりゃそういう点が出て来ると思いますよ。でも、大体はワークブックなどがあるでしょう。いろんな白文練習ノートとか、ああいったものを並用してやっていくと、生徒は結構付いては来ているようにすけどね。ただ、あれを長くやってると、やっぱり飽きが来るでしょ

うが、現実には教材が多いから、年間の授業時間を考えると入門編にそう長くはとってられないから、そこが難しい所だと思いますよなえ。

#### 国語科の中での漢文の入門指導

加藤 ですから、漢文という一つの独立した教科ということであること自体、私は今は間違っていると思うんです。国語科の中に漢文という教科があるんだということです。大体、漢文だけを担当して、現国や古文はやらないって先生が、東京なんかでは多いみたいなんですけど、我々地方の学校にいと全部やりますから、そうすると、現国の中にも漢文的な要素もあるし、色々出て来る訳です。で私なんかは、最初の頃はやはり時間数から言っても現国の方が多いわけでそこには漢文的な漢字熟語といった問題もまあ沢山出てくる訳ですから、そこで日本語の中に漢文的な要素がどれくらいあるのか、ということ——前に学会でも報告されたと思うんですが、たとえば「天声人語」の中で、漢文的な表現、漢詩文に典拠を持つ言葉などを取り出して発表なさった先生が居られましたけれども——そういう形から、我々はやっていくべきだと思うんです。生徒というものは、意外とそういう漢字熟語といったものが、我々日本人の日常生活の中に入っていることを知らないんですね、そういうものに目を開かせてやるってことも我々の一つの務めじゃないかと思ってますけれど。——栃木県の高校入試の出題がもう大体そういう方向に定着して来たんですね。純粹な漢文という形では出てこないんですが、漢字熟語とか故事成語ですね、そういう形を憶えるという形で、それでも入試

で二、三点から五点ぐらいまでの間ですけれど、漢文的な要素が最近かなり出てます。ですから、漢字っていうことですね……。

司会 今話題になっている入門をどうやるかという問題で言えば、やはりそれを漢字漢語とか熟語とかで始められるってことですか。

加藤 そうです。たとえば辞書を引くということも一つのポイントになってると思いますが、その場合、漢文の授業だけに辞書を引くんじやないということですよ。

司会 加藤さんがおっしゃった、“国語科の中で”っていう問題の立て方は面白いと思うんです。そこでそれを、金子さんがさっき仰言った、教科書の現状との兼ね合いで言うとか、具体的にはどんなやり方をしておられるんですか。

加藤 ですから、まあやはり教科書以外に言葉を持って来るわけですね。その日によって新聞のコラムなんか持って来たり、現国の中にも必ず出て来ますから。

### 入門指導―教授法の集大成を

諺口 それですね。僕は、今日の話し合いの中でいろんな面に、波及する問題だと思っただけでも、今、入門指導の問題に限ってみても、色々意見の違いが出て来ましたですね。たとえば漢字あるいは熟語から入る、詩から入る或いは文章から入る、あるいは金子先生のようにいっそのこと白文からやっていったらいいだろう、という風に……。これねえ、てんでんばらばらでやるんじやなしに、一堂に会してですね、かくあるべしという形ではなしに、例えば詩から入っていった場合にはどういう風なこと

が出来るか、或いは漢字熟語からやった場合にはどうか、という風なものを集大成する、そういう作業が必要だ。そう思うんです。これまで入門期の指導について書かれたものを見て居りますと、あの教授者の入門指導のパターンはこうで、これがベストである、という風な形で言われていますけれどもね、そういう風なもの一度、一堂に会して集めて検討していつてみるという、そういうことが必要ではないかということです。そこでもう一つ波及的に話が広がって行くんじやないかといいますのはね、例えば各教科書の教材の読み方一つに取りましても、これまで、それだけに非常に個性豊かにその教科書の編集者の好みとかその人独自の訓読法とかに基づいているという風な形だったんですね、そういう多様な読み方の中でどこまでが共通事項で、共通理解が出来るか、という風なものをやはり基本的な事項として作っておく必要があるんじやないかと思うんです。つまり先程加藤君が言った様に、我々が扱っているのは漢文という独自の教科じやなしに、国語科の中の漢文という風なものだと考えていった時に、漢文畑から出て来た人だけにしか通用しない教授法とか、扱えない教材とかいうものは、これからはちょっと問題になって来るんじやないかと思います。

司会 そうでしょう。大事な御提案ですね。

加藤 良く言うんですね。前の女子校の時に、それまでA社の教科書を使ってたんですが、私がB社のものを使うことにしたんですよ。そうしたら指導書がどうしても、まあA社のよりは、完備

してないんで、使いこなす自信がないって言うんですよ、他の先生が。それでまたA社の方にかえたことがあるんですが、やはり漢文出身ではない先生方の中には漢文を持つのは余り好きじゃないっていう先生もいますからねえ、特に女の先生なんかそうですけれども。

司会 いや、金子さんがおっしゃった入門の問題というのは、おっしゃるように、オリエンテーション、つまり方向付けですよね。だから、これは、漢文というものを教育全体の中で、あるいは国語教育の中で、どういうところに位置付けていくかという問題に係わりますね。大変大きな問題を含んだテーマだと思えます。

#### 小・中・高の一貫性

金子 例えば、今謡口さんからももらった「資料集」ですが、二十三頁ですか、中学でどういう事を学んで来ているのかが出てくる。三年のところを見ますと、漢詩と論語が挙がっている訳ですが、ここにあがっているのは、従来の教科書ですと、入門編の最後の方、ないしは入門編が終ってから出て来る教材ですよね。例えば「黄鶴楼」にしても「静夜思」にしても「春望」にしても……。実際に中学でどういう授業をやっているかってことは私はよく判らないけれども、教科書の中身を見た限りでは相当内容に突っ込む編集をしているんです。いろんな、例えば吉川幸次郎さんの、鑑賞文を付けたりしてですね。で、彼等がそれを本当にこなして来てるかどうかは判らないにしても、このレベルまでやって来る訳ですよ。今度の指導要領の改訂にも中学との関連とい

うことが随分言われているわけですけどもね。僕は中学でこういうものをやって来たんだあるならば、それを生かして入門指導をやってみようって言うわけですよ。それがね、国語Iなんかだと、ある意味では最後まで入門指導かも知れませんよね。そこでまあ、伊藤先生が言われた様に、漢文で何を教えるのかということと関わるのですけれども……。

司会 その入門指導は多様であっていい訳でしょう。つまり文学的な入り方をする人、言語、つまり言葉から入る人、その両者は結び付かなきゃいけないでしょうが。或いは現代国語ですか、そういう意味で教養的なことから入る。加藤君の新聞コラム云々と言われたような、日常的には生徒が全くそれを意識してないくらい深く日本語の中に入ってる漢語文化みたいなことですか、そういう所から入る人もいい。それぞれの多様性はあってもいい訳でしょう。

金子 それはあってもいいと思うんですけど、中学でこれだけのものをまあ一応やって来ている、それを踏まえて、それは、国語科の中の漢文であるにしても、どこから入っていったって、どうもっていったらいいのか。それはまた、前に帰りますけど、漢文というのは何を教えるのか、というところに係わるんですけども、僕は少なくとも従来の教科書編集的な漢文入門についての再考の時期だろうと思う。しかも極端に時間が削られて来る中で三年生までに何をどの程度教えるかという絡みもあります……。

謡口 それにつけ加えてですけども、僕はこんな事を考えるんです。今、入門指導の取り扱いに話題が集中してるわけですけど



も、中学校の話題が出てますよねえ、もう一歩小学校の方へ入りますと、ただ単に漢字の書き取りという、そういう形になってるわけですね。一点一画に厳格すぎてしまふ、撥ねがなければ、つにするとか。我々が今度の改訂なんかで非常に少ない時間の中で効率を上げなければならないということを考えた時に、小学校中学校と関連させながら、国語の中の所謂漢文的な要素を、小学校の高学年あたりですでに動機付け関心付けというような形で持つて行く、それから中学校あたりでも、今問題となっている入門期の取り扱いあたりで、この部分あたりまでは中学校で出来るんじゃないか、そして高等学校ではそれを受けて、どういう風に持つて行ったらいいか。――「小・中・高一貫」ということは言われているんですけども、それをもう少しきめ細かな形で、一貫性を持たせるといふ、そういうものでもって、国民の中に漢字漢文と云うか、そういうもののへの意識の掘り返しをやらない以上は、ただ単に高等学校に入つて来た段階だけで漢文教育をどうするか、という風なことではおさまらない様な現状になって来ている。

加藤 つまり、国語経験ですね、結局は。少し問題が大きくなつて来ちゃつて……。

### 入門教材の取り扱い

金子 それからもう一つね。高校に入る、十五歳ですか、この十五という年齢ね。これはやっぱりある程度内容的なもの、それがどこまで理解出来るか判らないけれども、内容的にアップीलするものがあつた時にね、初めて返り点、送り仮名っていう所にも注意が行くんで、その内容的なものが非常に薄いもので引っぱら

うとするのは、僕は余り効率的でないんじゃないかと思うんですよ。内容的にも興味が出て来ると、それならば、それを読むために、返り点にしても送り仮名も憶えよう、それに従つて読めるようにしようという意欲が出て来るんじゃないか、そんな気がするんですよ。だからね、田部井さんがやられたことですけれど、昔は旧制の中学に入つて漢文を習つた。今の中学一年ですね。それぐらいの段階ならば、ひっくり返る事自体に、まあある意味じゃ興味を持つて、それでやれる面があつた。所が今はそれから三年たつてる年齢ですよ。ただひっくり返る事を面白がる年齢じゃあもうなくなつてゐる。何か漫画的な意味しか感じられないでバカにしてしまふ場合もあるんですね。多分こは、内容のある、それは故事成語でも自然でも詩でもいいですけどもね。そういうものを彼等につつけながら、且つ訓読なら訓読の約束というものを憶えさせるということが必要じゃあないか……。

司会 内容つておっしゃるのは、文学的な或いは思想的な意味での内容という様なことになるんですね。

金子 ある程度そういうものを持つたものですね。たとえば、今まで故事成語という入門のやり方がありましたね、例えば「朝三暮四」というようなものがありますが、あれを今までの入門編ですと、後ろの方をカットしちゃつて、猿が恐れ入りましたで終わるわけです。その後の何故そういう話をするのかを言つた部分がいづつもカットされる訳ですね。

司会 なるほど……。

金子 それから「五十歩百歩」にしてもね、何故五十歩百歩と

いう話が生まれて来たか、という前置きの部分はカットされる。入門編というのはそういうものを入れて来ていいと僕は思いますよ。入門編でもそういう形で内容的にも生徒にアップグレードさせる。させながら訓読の約束といったものを系統的に教えていく。

「これは全く返り点、送り仮名の練習だ」というような教材は、もうそろそろ考え直していい時期じゃないか。まあ附録ぐらいにつけておくのは、それはいいと思いますけれどもね。

### 入門指導における「繰返し」ということ

司会 今のお話でね、こんな事をちょっと思い出したんです。

お話の中学から高校への移行という時には、どうしても或る程度繰り返しになりますね。そのアナロジーとしてなんですけど、私は大学で教えなければならぬでしょう、その時やはり同じようなことがあるような気がするんです。大学で漢文入門みたいなことをやる場合もそうですし、現代中国語、これはまるで初歩からやるんですが、その場合も僕は高校の今のお話の入門編を使っているんです。学生に馬鹿にされそうな気がいつもするけれど、同時にそれが要だという気持ちもありましてね——つまり同じ事を繰返して教えるんだが、それぞれの年齢に応じた整理の仕方というものはあるでしょう。同じ事なんだけれど、「中学でこれらの事を教わって来ただろう、それは高校の段階で再整理して言えば、こういうことなんだよ」といった繰返しというのはあり得るし、場合によっては必要だという気がしているんです。たとえば、加藤さんの仰言っていた漢字とか熟語の問題を、僕も大学での漢文入門や中国語初級文法入門によく使っています。藤堂明保先

生の『漢文概説——日本語を育てたもの——』なんかを利用してもらいましてね。たとえば、「菊」「大学」……等々は「ガラス」や「カルタ」と同様に元来、外来語、中国語なんだよとか、返り点・送り仮名のテニヲハですね、「書ヲ読ム」と「山ニ登ル」、「花開ク（開花）」と「花開ク（花開）」……等々のちがいとかが、そんなことは勿論高校でやって来ている事なんだけれど、大学のレベルでもう一度繰返してもいい、と言うより、繰返しの仕方がある、と思うんです。繰返すことによって知識を確実にさせるという面と、繰返しだからこそ却って新鮮に新しい発見の面白さを感じさせ得るという面と、両方あると思うんです。一般的には高年齢になるにつれて抽象度が高くなるわけですね。漢語、熟語やテニヲハも僕は主述（花開）、動賓（読書）、存現（開花）……といった中国語初級で基本構造をやる時などに使っていますが、さき程、金子さんが仰言った「内容」ってことを成る程と思ったのは、たとえば一つの話事成語を、中学では前後を切って教え、高校では前後をつけてその意味を教え、大学ではその思想的背景を、中国哲学史の材料として教えるといった、勿論、たとえば、ということですが、そういうそれぞれの年齢に即した扱い方というものが巧く繋がれば大変効果的だという気がするんですが、どうでしょう、その辺は……。

金子 僕は、今先生が言われた様な事はやらなきゃいけないと思うんです。高等学校に入ってもね。ただ、そのやる時の素材として、断片的なものを使うのか、それともある程度中味を持ったものを通して、それを確認させて行くか、という事なんです。今

までの入門書は駄目だからいきなり内容だけぶっつけていけという事じゃなくて、そういう素材を使いながら今言われたようにそれを繰り返して行く。そういう意味で国語Iすべてが、同時に入門でもあると、そういう事なんで、やらないでいいという事じゃない。

**司会** いや、私が余計なことを言いましたのは、金子さんの、断片でなく長文を使って思想的文学的内容を、というご意見と、加藤さんのご意見の熟語漢字という点、今度は逆に極端な断片になっってしまうだけでも、その内容の与え方とか中学との関係とかを考えると、お二人の仰言ったことは全然矛盾なものにもしてないんじゃないのかなというような事をちょっと言いたかったんですけれどもね。

#### 詩の暗誦から入る入門指導

**加藤** ですから、あくまで並行した形でやっていくのが正しいと思いますし、一つのやり方だけに固定する必要はない。私は最近、もう一つのやり方として入門の時に思い切って、一番最初に詩を持って来て、これを暗誦しろって、そういう事から始める事も、一ついいんじゃないかと思ってるんです。

**司会** 一つありますね、その行き方が。

**加藤** やはり古典というものは我々がそれを憶えるだけの価値があるものだという認識を持たせるということ、それは同時に言葉が持つ響きという点、リズムという点、それを、詩ですからやはり朗誦に適している、そういう作品を朗読することによって味わえるということです。大学を卒業した後になってから鈴木修次

先生に、漢文というものは、やはり音読を重視すべきだということとを教えられたんです。それから僕は女子校でも、男子校でも、まず声を出して読むことが基本だということを強調して来たんですが、そういう風にやらせると、生徒は、ある程度長い文章でも暗記出来るんですね。リズム感とか能力とか一定の条件は必要ですけど。たとえば、「春望」なんかは中学時代に必ず憶えて来ている訳です。でも、もう一度高等学校でやらせると、やはり憶えていないんです、しかし、これをもう一度暗記させると直ぐ出て来る訳です。ですから、言葉なんて繰り返して憶えて行くんじゃないかという風に私も今考えてるんですけど、まあ、色々な形で思い切って、まず暗誦させる……。

**野地** 詩から入るその方法は私もね、考えていたことがあるんですよ。B社の教科書の編集をした時、私は自分の案として各学期、学年じゃない学期、最初に詩から入る案を出してみたことがあるんですけどね。ただ唐詩の世界の深い味わいを味わせる教材でしょう、その鑑賞力が高一程度ではまだついてないだろう。唐詩を単なる入門暗誦だけで終わってしまったのは惜しい、ここに持ってくるのは惜しいということで、結局は話の筋の判りやすい故事成語から持ってくるんだということになったことを今思い出しました。

**金子** その点ですけどねえ、分数も見ただことないっていう生徒もいる中でね、まあ、学校によって生徒によって相当違いがあるんでしょうけども、僕は案外ね、今の生徒は、返り点の付け方は判らないかも知れないけども、詩の世界なら詩の世界にある程度

浸れるものを持っているんじゃないかと思うんですよ。だからたとえ古文なんかですとね。文法的には説明出来ないけれども、ああ、これはこういう気持を表わしているんだな、という風な事を臆気ながら掴む能力は、相当あるんじゃないかと思うんですね。

それをたとえば語法的にどうかとか、文法的に説明せよって言われれば、それはもうお手上げだということはあるかも知れない。その辺をね、彼等が持つてゐる長所を伸ばすようにしながら足りない部分をどう付け加わえて行くか、その付け加わえて行くのにどういうやり方が一番効果的なのか、という所が、これは漢文だけじゃなくて、古文入門にも、或いは現代文の指導でもあるんじゃないけども……。

司会 一度この雑誌でも、さつき舘口さんが言われたような形で、色々な「入門指導法」の特集がやれるといいんだな。

#### 五十七年度改訂をどう迎えるか

司会 入門指導のことに話が集中しているんですが、実はお話の前提に今一番大きい問題として五十七年改訂ということがあるわけでしょう。

金子 やはり、それが頭にありますねえ。

司会 その辺の事についての現場の受け取り方について……。

加藤 ですから、私などは、オールドツクスな漢文という形よりは現国の方から入って行くという意識が強くなって来ているんです。漢文の教科書見ても授業時間数から言って、一冊一年分を全部終わらせることはまず絶対に不可能なんです。まあ三分の二終わればいい方です。とにかく多種多様な生徒、四十人から

五十人ぐらいの生徒を教えるんで、それをこちらで詰め込めばともかく、生徒を動かすということになれば、やはり我々に非常に意識があつたとしても、とっても無理だと思うんです。それで、私自身、学生時代漢文は人間教育だなんて教えられたんですが、そういう気持ちには、最近ほとんど捨て去りましたし、大学時代は思想の方を勉強してたんですが、教師になつてから文学に目覚めたって言っちゃなんですけど、文学の方がやり易いし思想教材においても、やはり文学的というか、言葉の方から入っていくと考えています。たとえば、荀子の性悪説の冒頭の部分とか、荘子の駢拇篇が出てくるんですが、これなども思想と言うよりも文章としての面白さがあつて、実際に生徒に教える時も、一つの文章として文学的に考えてみた方が生徒が興味を持つんです。そういう意味から考えても、こちらから全て与えてしまふことは絶対避けなきゃならないんじゃないかと思っています。それから今私は出来るだけ形を教えて、形が判つてから中身へ、というやり方を考えていますけど。

司会 具体的には五十七年度から結局どう変るんですか。

金子 学校によってやり方は違いますけれどもね。昔「国語甲」という教科書がありました、あれと同じ様な形で一冊の本の中に現代文、古文、漢文を全部一緒にして一冊になる。また従来ですと、古典の中で、漢文の時間がまあ週一時間ぐらい、古文の時間が二時間ぐらい取れたのが、今度はそういうやり方は非常に難しくなるんだろうと思うんです。

野地 I、IIやりますか、やはり。

金子 IIはやりません。と言つても私はもう現場を離れたんだけども、Iをやつて、二年から現代文と古典と分れますから……

野地 全国的に見るとIIまでやりますよね。

金子 ええ、八、九割そうでしょう。

司会 その場合謡口さんところなんかですと、一人の教師が通してじゃなくて漢文の部分は漢文の教師がやるっていう形を考えてらっしゃるんですか。

謡口 そうです。漢文、古文担当のものと、現代文担当の者という風な分け方だと思いますね。

司会 教科書は一冊になる訳ですね。

野地 その教科書を、みんな寄つてたかつてやる訳でしょう。

まあ生徒は一冊で済むからいいけど。

金子 そういうやり方をやる学校は、新潟県ではほとんどないですね。新潟県ではだいたい一人が通して持つことが望ましいっていう形でやっています。

野地 一人で全部？

金子 あ、いや高一なら高一で教える四時間なら四時間持つ方が望ましいわけですけどね。文部省もそうなんです。

司会 謡口さんの所は、漢文は漢文専門の人が教えるんですね。それは改訂後もその線で行こうということ？

謡口 そういうことなんです。

加藤 いけるかな。疑問ですね。

野地 うちも、改訂後も教科書は変わるけれども、体制は同じ体制でいくようです。

加藤 全く意外ですね。謡口先生の学校は特殊な学校だから、謡口 いや、野地先生のところだって……。

加藤 恐らくそういう学校はほとんどないと思うんです。県に一枚ないと思いますね。

謡口 でも東京都の場合には捜していけば、まだかなりあると思いますよ。

金子 僕のところなんかは、今までそういうやり方を強く出していたんですが、それさえ出来なくなっている。以前は漢文が二人いて全部埋められたんですが、状況が厳しくなつて僕が一人になり、今年僕が出た後はいなくなつてしまいました。

そうなると、今度は、今まで漢文は余り得意じゃなかった人も教えなきゃいけない。すると教師間の打ち合わせ、合同教材研究なんかを、相当やらないと、下手すると漢文教材はすつとばされる可能性さえ出てくる。

司会 全国的に言えば、それが一般的で、野地先生や謡口先生の所に漢文だけ分けてやれる方が、むしろ……。

金子、加藤 少ないです。

野地 あ、少ないの。そうなの。そりゃ僕は知らなかったなあ。

加藤 そりゃ栃木県なんてほとんどないですよ。

野地 そうですか。うちの場合現国、古文、漢文みんな違う教員が担当します。一冊の教科書を……。

金子 それは、やっぱり相当特殊な学校ですよ。

野地 でも僕が漢文だけやつてることじゃないんですよ。

現国、古文、漢文三つやるんです。三つやるんだけれどもともかく、このクラスは漢文をやる、このクラスは古文をやるってことになる……。

金子 結局それをやらちゃ困るっていうのが本来、総合国語の……。

司会 趣旨でしょうねえ。

金子 だからね、一人の人が現国も漢文も全部持つということ前提にして、なお且つ生徒をどう引っぱって行くのか、ということが、僕の一歩の関心事だったんですけどね。

野地 さっきも金子さん言われたけども、その先生の好みや専門の分野によって、ウエイトが出て来るってことは十分考えられますよねえ。

加藤 それに現代国語の教科書はかなりボリュームがありますね。しかも、教科書っていうのは、現国で新しい味を出そうとしていて、内容も毎年変わっていますから、我々、その現国教えるものすごく精力使う訳なんです。教材の準備とかありますから、まず漢文の準備なんてほとんどなくなっちゃいますよね。

野地 こないだの創刊号の座談会で、上田さんが山梨県では漢文専攻の教員は五人だと言われていたでしょう。そういう所はこれからますます多くなるってことですね。そういう現代文専攻の先生方が漢文をやるってことになれば、最初に誦口さんが提示してくれたけど、何を扱うかという問題がね、大変狭くなって来ちゃう。

金子 僕はそれだけに中身のある教材を生徒にぶつけて、生徒

の反応を呼ぶようにしていかないと思うんですよ。入門編なんて誰にでも出来ますもの、返り点付けて送り仮名。だけど、それをね、そこで終わってしまったんじゃ、結局生徒にとって漢文でなんだ、ということになってしまいう……。

司会 つまり現代国語と同じだけの知的な関心と呼びうる……。

金子 呼びうる教材を持って来てやらなきゃいけないんだということですよ。

司会 そして、それにふさわしい扱い方をするか否かが一番大事なことだということでしょう。

「漢文で面白い」と言われる授業が……

金子 まあ現代文、とまでは行かなくても少なくとも、古文に匹敵するぐらいの内容を持ったものを生徒にぶつけていかないと……。

司会 それを言うなら思想的な内容という面では、漢文、中国古典というものは、元来、古文よりはむしろ深いものを持っているものでしょう。

金子 所がね、入門あたりだと、要するに、単に「歳月人を待たず」云々で、終わってしまうわけですよ。それじゃ、もう生徒付いて来ませんよね。

司会 まさにそういう問題をお立てになるからこそ、金子さんは、さっきから入門指導の問題にああいう問題提起をなさっている訳ですね。

金子 随分昔のことになってしまったんですけど、就職した初年度、漢文教えてたんです。夏休みに東北大学に入った生徒がグ

ランドに来てまして、「先生漢文ていうものは面白いものなんです」と言うんです。どなたから教わったのか判りませんけど、大学に入って、「論語」を一般教養でやったと言うんですよ。これには僕は随分反省もさせられました。まあ大学の授業と高等学校のそれは少し違うんだという気持ちも持ったんですが、面白いと言っても色々な中身があるんでしょうけど、高等学校でもやはり漢文というのは面白いもんです、と言われるような漢文を僕はやりたいと思うんですよ。その動機付けは、一に入門期にかかってるんじゃないか。

金子 それでね、今年も三年生を送り出したんですけども、卒業した連中が色紙を書いて寄越してくれた、その中で漢文ていうのは面白いものだったという風に書いてくれた生徒が一クラス四、五人はいましたね。

野地 それは要するに金子さんの話の内容でしょう。同じ教材を扱っても、要は、扱い方によって面白くなってくるんじゃないですか。

金子 だからさ、みんなが面白く出来る様なことを、やっぱり考えて行かなきゃ。あいつから習ったから面白かったとか、あいつから習ったから、どうも面白くなかったとか言うんじゃない、やっぱり現場としては困るんじゃないかな。少なくともあるレベルの面白さっていうのは、誰が教えても、生徒に与え得るという要素を作っていくのが、少くとも漢文を専攻した人間の一つの役割じゃないかっていう気がするんですよ。

野地 金子さんの仰言るのは、新しい、全く新しい教材を掘り

起こせということではないんですよ。

金子 うん、そうじゃないんです。たとえば論語ならその論語教材をどういう風に構成してみるかっていうことが大きいと思うんですよ。単に論語の中の有名なものをポンポンと並べても、それでは生徒は食いついて来ないと思うんです。論語のこういう所に焦点を当てて、そのためにはこの章とこの章とこの章をピックアップしてみる。今までの高校の教科書の中で一番それをやったのはK社だと思うんです。あれは小林（信明）先生の個性が出た教科書ですけど、僕はあの教科書扱って非常に生徒を引っぱり易かったですね。三回ぐらい使ってますからね。この間の、この第一号で、陶淵明を扱われた……。

司会 上田さんですね。あれもK社の本でしたね。

金子 はい、あれと同じ本です。あの教科書は指導書が面倒で、どうも取りにくいっていうので、採択は余り多くない教科書だったようですけども、僕は扱い易かったし、生徒も引っぱり易かったですね。教材の取捨選択をすればいいじゃないかと言われるけど、僕ら取捨選択はするんですけども、教科書の構成っていうのはある程度そのまま使っているところがあるでしょう。全部編集し直して言うのは、上田さんみたいな形でやればいいんですけど、中々出来ない。上田さんはK社の本を使ってなおかつやられた訳ですけども……。僕なんか今の教科書で捨てる箇所を見付けるくらいが精一杯ですね。

司会 金子さんの仰言るその「論語」教材の構成というのを、もうちょっと具体的に言って頂くと……。

金子 例えば、NHKブックスの金谷さんの論語なんかを参照しながら論語の中で「学」というものが、どんな風に扱われているか、これは現行の教科書に載っている教材の中からも抜いて来ていくつか集められる。次にはその「学」と例えば「君子」というようなものがどういう風につながっていくのか……そういう一つのテーマみたいなものを、組み合わせて行くと、案外面白いものが出来るんですね。

加藤 というと、古典Ⅱ的な扱い方ですね。

金子 そうですね、けれども論語は実際はⅠで出て来るでしょ。そこでⅠだから羅列的に並べるんじゃないかと、例えば、ものを真似するのが「学」で、同時に「学」というのは真似して知識であったものが実践に移す時にまた「学」になる、「学」は狭い意味で言われる場合と広い意味で言われている場合と……というような形でね、組み合わせ方によって、生徒がそういう事について考えていく場が作れると思うんです。だからⅡ的だと言うよりは、Ⅰでやれるんじゃないかと思うんです。そういうことをやりながら同時に、訓読の仕方というのと同時にやっていく、内容的なものとは型というものは分れるものじゃないと思うんです。内容が同時に型と重なっていつて一つの学習の場になります。

野地 「型」は何度も三年間やり続けなきゃ駄目でしょうね。最初に入門の時に、全部教え込んだって、これはしょうがないから。入門はもう本当の中学の復習だけを、私は大体一時間ぐらいで話してしまつて、あとはもう、金子さんが仰言る様に、本文に即して出てくるたびにやるようにしてますけど、ただ現実に国語

Ⅰの教科書の中の漢文は、量から言っても総時間で割ってまことに微々たるものですから……。それにいろんなさつきも話したように色んな人達が担当するということになる、そこまでの理解度がですね……。勉強しなけりゃいけないのが当り前なんだけども現実において、じゃあ、私らが現国を持った場合、どこまで太宰なら太宰の専門家になれるかっていうと、判りませんものねえ、こちらも……。

金子 でもね、僕等例えば現国やる場合、太宰なら太宰を一応その作品の周辺は読むとか調べるとかするでしょう。この作品を読むためには、これとこれぐらいは読んだ方がいいよとか、少なくとも教師はやるでしょう。漢文だって、同じ様なものじゃないですか。それを臆効がってやらないか、やるか、の違いですよ。ね。

野地 その我々が本来教師としてやるべき所を指導書で書いてほしいというのが実状かもしれない。

金子 うん、だから指導書が非常に完備して来ればだけど、結局は自分でやらなきゃ。現国だってそうでしょう。現国の指導書なんてのは本当に、当てにならないでしょう。その分は結局自分でやる訳でしょう。僕は、漢文だからレベル低くていいんだみたいな考え方はいやなんです。もう同じじゃないか、現国だってね。

野地 さっきの金子さんのね、何人かの生徒が面白かったと書いてくれたという話だけどね、これは、とても大事なことで思うんです。そのためには、やっぱり教科書だけでそれをやるのは現実には難しい、ページ数も自ずから決まっちゃってますか



らね。そうなると副教材を教師が努力して捜さなくちゃいけないんだらうと思うんですよ。だからその時に、近頃では高校でもゼロックスだの謄写ファックスだのがかなり使えるようになったので、非常に効力を発揮しますね。僕は例えば「孟嘗君」です。例の「鳥の空音」ですよ。あれだけやるのもいいけれども、陳舜臣さんの「十八史略物語」かなんかそういうものの一節をコピーして渡して、孟嘗君はどういう生まれだったかなどということをやって、それからもう一つは屏風の陰に書記を置いて……という話などを副教材として置いて、そんな事で興味を持たせるようにしていますけどもね。

金子 僕は一寸違うんだなあ。さっき「面白くなければ」と言っただけで、僕は教える時は非常に厳しいんです。全部生徒に読ませて、生徒に口語訳させて、単語の説明もさせるんですよ。つまり「面白かった」ということの意味ですけども、例えば、「孟嘗君」であればね、もう少し史記あたりに当たって、その時代とか孟嘗君というのはその時代でどういうものであったのか、出来ればそういう事、そういう世界への理解、そういうものを与える方がいいと思う。だから与え方は色々あっていい、場合によってはこっちで話してやる、或いは……。要するに何て言うのかなあ、「興味・関心」という事は、言い方悪いかも知れないけど、レベルダウンじゃなくてね。上に引っぱって行くようなそういう要素の方が、僕は、生徒が結局最終的には面白かったという風になるんじゃないかと思うんだなあ。

語口 いや、今の話聞いてれば一緒だと思うんですよ。同じ事

ですよ。

金子 全然違う。

漢文専攻でない教員にもやれるか否かが課題

語口 結局ねえ、生徒が関心を失なうのは、訓詁注釈だけに終わって、ただ平板に授業を流していくのでは、興味関心が持てないですよ。時代背景、或いは人物——さきほどの屏風の陰で書記に書き取らせたとかい、人間性が滲み出る様な形——それがその文章を通じて得られた時に、その一つの文章が甦って来て、面白さを感じるんじゃないか。だから、我々がやらなければならぬことというのは、授業を通じて自づからそういった作業をやって行くことであるわけでしょう。そこで、今度は漢文畑から出て来た教師だったらそれは出来るかも知れないが、では漢文をやらないという人が、それがどのくらいやって行けるか、——そういことが、これからの漢文教育の課題になってくるんじゃないか。

そういことを考えてみると、教材の精選ということと、副教材あるいは教授用資料の整備ということがですね、非常に切実な問題になってくる。例えば孟嘗君列伝を取るにしても、この部分は取るけれども補う部分として、さきほど仰言った十八史略の原文を併せ載せるとか、或いは論語を扱うにしては、弟子達のことをもう少し克明に、子路なら子路という弟子はこういうような人物である、いう風な事が補足的に盛り込まれるという風な事はしなければならない。そう考えますと、一社だけの教授用資料では足りない、この仕事は、教科書会社一社だけの力で及ぶ所では

ないと思うんです。もう少し広くほくらの総力を挙げて、漢文の教材として使えるものにはこういうものがあって、それに裏打ちする材料は、こういう風な形であるんじゃないかという風なものを作り上げておかないと、漢文プロパーでない人は、本当に手を挙げてしまつて、漢文を担当することをためらつてしまう。それがひいては全国的レベルでみて、漢文についての興味関心を失なわせていくことになつていくんじゃないか……。

**野地** あかね、教科書編集の時とか出版社の人が来た時なんかによく言うんだけど、今、謡口さんの仰言つたようなものを教科書の中に入れることは現実には頁数の関係で難しいことが多いようです。それなら付録としても、ちゃんと指導書を作るべきじゃないか、それは何も漢文のものだけに限らず、日本語の文章の中から選んでもいいじゃないかということをよく言うんですよ。謄写ファックスにとれる様な大きさでね。そのくらいまでしても、それによつて生徒の興味が増すのならば、親切過ぎるかもしれないけど、私はそれでもいいと思うんですけどね。

**謡口** 現国でね、O社がそれに似たことやつているんですよ。謄写ファックスが取れる様な形で、例えば一人の作家の略歴なり、他の有名な作品の抜粋とか、それが直ぐ教材に使えるような、そういう資料集を作つたんですよ。

**野地** そういう方面までも、もうやり出さないと難しいんじゃないかねえ。どうも……。

### 漢文法のよい副教材がほしい

**謡口** その話と合わせてですねえ、僕が痛切に感じるのは、古

文の方は入門指導なんかということもさることながら、一応古典文法という副教材を手渡すことが出来る訳です。所が漢文の方で、その古典文法に匹敵する様なしつかりした副教材を手渡すことが出来るのかというと、意外にありませんで、巻末に附録のような形で付けられている一覧表とか、そういうようなもので取り扱われている。つまり、我々が漢文に慣れると言っても、じやあ納得いくような形で、生徒を説得できるような材料を持つてるかというところ、まあ付録として教科書の巻末の方にごまかし程度に載せられているものしかない。そういうところを含めて、漢字熟語、故事成語といったものを含めて、訓読のきまりとか句法集とかという風なことについても、きちんとした一つの纏りのあるものを用意する必要があるんじゃないか。

**野地** 漢文法というやつがね、何にしても未整理ですよ。古典文法における橋本文法のような、一つのが学校文法として取り上げられていけばいいけれど……。確かにそういうものが欲しいと思いますね。話が前にもどりますが、さっきの金子さんの「朝三暮四」の話もね、前と後とを入れるでしょう。そうすると現場の方からやっぱり苦情が来るんですよ。とつてもつて行けない、うちの生徒たちは最初からそんな長い文章を載せられたんじゃない息が切れてしまつて。

**金子** 長いというけど、「朝三暮四」の最後の方は、それほど長いものじゃないですよ。

**野地** まあ、たとえばの話ですけどもね。だから、極力短してくれということを要求されるらしいですよ。そうなるよねえ、最

初にまず中学の復習をさあつとやつといて、それからもう一回やるという形をどうしても取らざるを得ないということに、どの教科においても、なってしまうんですね。

### 多様に使える教科書

謡口 それでねえ、僕はあの、教科書についても一寸提言があるんです。これだけ多様化して能力や興味に差のある生徒を一つの教科書でまとめることは非常に困難な状況になって来てるんじゃないか。そこで、教科書編集の折に、先程金子先生がおっしゃった程度のものを含めて、生徒に資料として渡せるような、そういう手当てが欲しいです……。

司会 先程お話の副教材とは違うんですね。

謡口 違うんです。教科書サブ資料というような形で、たとえば、「朝三暮四」ならその後の方の部分が付いてる訳ですよ。そうして今は高等学校でもゼロックスとか、騰写ファックスなどがかなり自由に使えますから、生徒の程度に応じて現行の教科書程度でいい学校はそれでいいし後の方の叙述まで含めて読解出来る生徒達については、その部分をリプリントして配布出来るような教材が「サブ資料」として準備してあるわけです。そういう形にしておかないと、国語Ⅰの中に於ける漢文は、〇・七五時間ですから、はっきり言って現行の教科書程度の作品なり教材では、のっけから駄目で、別の教材を持って来て与える以外ないというそういう学校もあれば、反面その教科書ですらもう出来ないという学校もあるわけですから、教科書の取り扱いということについても再検討して……。

司会 幅のある使い方が出来るような教科書と、同時にそれに追加出来るサブ資料を作れということですね。

野地 現国なんて会社によっては受験校向けなんかを分けて、二冊出していると聞いていますが、漢文ではそこまでは仲々ね……。

加藤 現実には、入ってくる教材がどうしてもオーソドックスになりますね。

野地 そう、教材が精選されて来て、しかも教授者がね。金子先生なんて特別で……、そうするとどうしてもその人達の懐かしい教材が入っていないと……。

### 「面白い」教材とは？

野地 以前B社だったかな、全く新しい教材が随分入ったことがありましたよ。あの本はほとんど採択されなかったそうだね。

やっぱり、新しい教材としては面白いけどもね……。

金子 果して教材として面白かったのかな、どうか。目新しさはあったけれど本当に面白い教材であつたかどうか、これは判りませんね。

野地 生徒の身になった場合にね。

金子 あのね、中国の笑話みたいなものをニコニコして入れる教科書があるでしょう。あんなの僕は生徒にとって全然興味も関心もないと思うんです。中学生か小学校の上級生くらいなら面白がるかも知れないけどね。

司会 金子さんの言われる「内容」の質の問題ですね。ああいうもので生徒の興味・関心に媚びたつもりじゃ困ると仰言るわけでしょう。

野地 確かに我々の考える面白さと生徒の考え、ちょっと違うんだなあ。「人面桃花」なんか、最後の所「半日にして復た活きたり」と言ったら、生徒は皆ワッと笑っちゃって……。それから、「留侯世家」など僕は面白いと思って一生懸命やったんですが、一緒にやった「田単列伝」の方をずっと面白がりましたね。

諷口 僕は、戦後の教科書の歴史ってのはあまり調べてないですけど、やはり扱われた教材には大体一つのパターンがあった。

前回の座談会の話にあった様に民主主義と矛盾しないという風な方向でずうっと来てる訳ですね。で、それについて生徒の側で、本当にその教材に食いついて来ているのか、関心を示しているのかという風な事についても、もう一度検討を加え、それからこれも前回の話の中に、高校の教材は史記と論語と唐詩でいいんだという説が御座居ましたね。それでもいいとしても、その教材をもう一度徹底的に当ってみて生徒の反応はどうかという風なことを検討してみる必要があるように思うんですね。

### 「国語の中の漢文」の発見

司会 さっき加藤さんがおっしゃった、「もう国語全体の中でやらなければどうしようもない」のだ、という考え方は、金子さんの提起と同じ事——現状を踏まえて、「レベルダウン」の方向ではなくてという点では——結局は同じ事だとは思いますが、具体的な方向づけとしては、やはり少し違うものを含んでいますね。僕は、五十七年の改訂という事を睨んだ時に、一つの大事な視点だと思ったんです。独立の教科としてじゃ、時間数を考えた

だけでも、もうとてもやれない所に追い込まれつつある。そこで諷口さんの言われるような教材の精選、副教材、或いは教授資料的なものをきちんとしてもらうってことも一つの方向だけでも、

一方で、その逆のことは考えられないんですか。——つまり、現代国語の補助として古文と漢文があると、いう考え方は当然あるとして、逆に漢文の副教材なり補助教材として現代国語も古文も使うという発想です。つまり現代国語専門の人が漢文教材も扱うんだとすれば、現代国語の中で漢文もやるということ、そういう方向というのは加藤さんなんかはお考えになっておられないのだろうか、というような事なんですけどもね。そのところはどうか。具体的には、さっきのお話では、漢文の資料に日本語の文章でもいいってことだったんですが、逆に、現代国語の資料に漢文がついているという形になるわけですが、そういうことは夢みたいな話ですか。例えば芭蕉の「夏草や……」の注に杜甫の「城春ニシテ……」が付いているという形を、一歩進めて、あんなのじゃあなく……。特に教科書が一冊になった時、現国・古文・漢文の教材の相互連関はどうなるんですか……。

加藤 たとえば、湯川秀樹の文章にはかなり、漢文から取っている所がある訳ですね、特に莊子の話など現国の教材にもかなり出て来るんです。ええと、莊子と恵子の問答の話ですか、ああいう文章で生徒もかなり興味持って来ますね。湯川秀樹の文章に何故この様な物理学と漢文というような一見相容れないようなものが入ってるんだ……そういう所に来るとやはり生徒は興味を持つ訳です。もう少し莊子を読んでみようということにもなる。そうい

うような入り方をしなければ絶対駄目だと思うんです。何て言うんですか、私は、今や漢文については悲観的な見方しかないんですよね。栃木県の教育委員会で江連隆さんのお兄さんが指導主事をやっておられて、よく話を聞くんですが、今や高校はほとんど義務教育化に近いんで、非常に低いレベルの生徒もかなりやって来るんだ、その低い生徒に合わせてものを考えなきゃいけないということを、しょっちゅう言われているものですから、私自身漢文の方でもちろん理想的なベストの方向を色々考えて、その低い生徒とか中間の生徒とかにどうやって興味を持たせるか、それをまず考えなきゃ絶対駄目だと思っっているんです。まあ我々が大学時代に教わって来た様な教え方は絶対出来ないと思いますし、国語授業のシステム化なんてこともよく言われて、私自身も、それをある程度授業時に実践した事もあるんですが……。まあ、そういうことで、やはり従来の発想を変えなきゃいけないのではないかと、思っているんです。ですから金子先生の仰言することはよく判りますし、私も漢文の教師ですから、もちろん双手を上げて賛成したいんですけど、他の人と、先生方のお考えとの間の落差というか……。

司会 いや、だから、若い世代の方が、前回の座談会のメンバーなどと、どのように異った認識を持っておられるかを、伺いたかったんですよ。——僕自身としては、竹内好の「日本文化はまだ中国文化から独立していないんじゃないか」という言葉が、ずっと気になっているんです。

つまり漢文教育の意味づけについていうことですね、この前の

座談会でアツと思ったのは、僕なんかはこれまで、何んとなく漢文は中国文化を教えるんだという風に思っていたら、東大の戸川さんが、そりゃ違うでしょう、漢文は日本語ですって言うんですね。中国文化を学ぶのなら現代中国語も必要だし、古典だっていろいろある、漢文は、その中の限定された一部でしかない。そりゃそうですよね。しかし我々、中国のことをやって来た者は、やっぱり、どこか中国文化を教えるんだっていう気になってるんだけど、そうじゃあない、訓読漢文は日本語の教育として大切なんだと言っそうですね。それで僕は比較文化みたいなこと言ったんですが、いま加藤さんが、国語科の中でやるんで「発想を変えなきゃいけない」と言われた時に、つまり今までのやり方ですと、例えば芭蕉の『奥の細道』の後ろに、杜甫の「春望」がついていたり、或いはその逆だったりという形ですね。そういう事ではなくてね、現代文学まで含めて、そこに漢文が引用されるといったストレートな形を必ずしも言うんじゃないで、文学的な発想とか倫理観とか思想とかそういうようなことでね、つまり日本語や日本文学を扱いながら、その中に、実は、殆んど意識されない形で入っている中国文化を意識的に相対化して取り出してみせるというようなことまで加藤さんは考えて居られるのかな、という風に思っただけですよ。だとすればそれは随分難しいことなんじゃないかとは思いますが、何か具体的にお考えだろうかと思っただけです。どうなんですか、そこまで仰言ったわけじゃあなかったんですか……。

加藤 いや、そういうことですよ。何て言うんですか、重い漢

文の伝統というのがある訳ですよね、それが教条主義的なこともありますし、論語と言えば、人間教育なんだから、孔子の言わんとすることを考えるんだと、そういうことは私等も今の若い生徒にはかなりきついと思うんです。例えば、「君子」なんて言葉を持って来ても生徒に簡単に受け入れられるものじゃない、「人知らずして、慍らず亦君子ならずや」という言葉を何回言ったって、さあっと素通りするだけなんです。素通りさせないためにはどうしたらいいかということで、私達やった場合には、魚返善雄さんですか、英語訳もあるわけで、こんなものも並行してやってみたこともあります。それと同時に論語はとにかく思想教材だという風な観点を、まず発想を変えて、私は文学教材という風に考えて、これも鈴木修次先生の受け売りなんですけど、そういう風にやって来た訳です。中国語の音で読んでみたり、色々するんです。生徒は、なるほどなあ、と思えば憶え易いという事ですよね。何故論語というのは永い間、読まれて来たのか、憶えられてきたのか、そういうことの意味をもう一度考えてみようじゃないか。思想教材というんですが、そういう面から逆に入って行けるんじゃないか。そして、言葉としてやはり憶えて欲しい。永い年月を経た言葉だということ、やはり人間の知恵ですよね。全然その意味がないんじゃない。そこから私は最近は入るようになっているんです。「朋あり遠方より来る、亦樂しからず乎」、この「乎」は反語の形だとか色々難しい事言っても、何かついて来ないような気がするんです。

話口 今、加藤さんの話を聞いててね、僕達の世代の中に、こ

ういう意識があるんです。と言うのは、付属高校でお亡くなりになった先生……。

野地 尾関先生。

話口 その尾関先生がですねえ、教育実習の前の日に、何故漢文をやるんだっていうような質問を受けた時に、漢文というものは、思想にせよ文学的な感性にしろ、そういうものを作る触媒である——漢文の存在理由としての触媒説というようなお話しをなさったんです。我々も漢文に対してはほんとに中国的な思维とか、中国文学とか、そういうものをいわば大上段に振りかぶれないようなところがありまして……。触媒という考え、これは根底に流れてるわけです。

司会 思想的な扱い方、つまり、さっきの金子先生の、例えば孟嘗君のお話ですが、僕はあれがある意味では一番正統な正攻法的な扱い方だと思っただけ。しかし、それは今の生徒にとって決して無縁なものではないんじゃないのかなあ、と……。

金子 僕も、そう思うんですがねえ……。

司会 と言うことはね。漢文が国語の一部だということにも関わるわけだけれど、つまり、西洋人が、アメリカの高校生が習う場合とやっぱり違う、解り易さがあるということは、少くともあるんだらう、とは思うんです。

金子 その辺を、例えば史記なんか扱っていますと、やっぱり感じるんです。一つの時代の中で一人の人間が、それが有意義ではその時代の典型的な生き方みたいなものですが、その生き方は同じ様なものがあると思うんです。しかもそれがいつの時代か

らつていう風な、この間の座談会でも話題になっていたような問題はありますけども、とにかく日本人はそういうものを読みながら、ずっと生きて来た訳ですね。史記なんかですと、乱世になると史記が読まれるという事が言われますが、そういうものをきちんとして読んで、読むということによって、自分なりに考えてみる。僕はそれでいい、それが人間形成にどうなのか、どういう形の人間を作るのかってことは判りませんけれども、しかし、日本人がずうっと昔からそういうものを読んで、人間なら人間、生き方なら生き方ってものを考えて来た。それを君達も一度目を通して、その同じ道を辿ってみる必要があると……。

謡口 その事についてですけど、今の金子先生のお話ですね。確かに教える側としてはそういうことを期待するんです。所が受け取る側の生徒達は、確かに史記の文章でドラマチックなもの、感動の源泉というようなものを感じ取ります。しかしそれは、彼等の人生であって自分の人生ではない、そこを自己同一化するってことは絶対しないんですね。区別するんです、それは、ドラマの中のことであって、自分自身の生き方は違うんだ、そういう生き方があったから自分自身もそうしよう、そういう風な形にはなっていないんですね。

金子 それは直ぐにイコールになんか、ならないさ。それはね、長い間そういう事が積み重なっていったね、ある年齢に達した時に初めて、ああ、あんなところで影響を受けてたのかなあっていうような形で出てくるしかないんですね。教育がそんなに、スパスパッと行くななんて事は僕には考えられないんだ。

謡口 というよりもね、もう少し言葉を繋ぎますとね。確かにそういう事はあるんですけどね。でも、我々の時代だったら、ある本との出会いとかいう風なもので、それが自分の生き方の支えとなったり、自分自身の存在の位置付けが出来た。そういう材料として、漢文なんかも役割を十分に果たしたんじゃないか。所が現代の高校の生徒達を見ると、もっとクールに、その所を峻別してゐるんじゃないか。言ってしまえば、先生の話は、それは受験の役に立つか、共通一次で、現国は百四十点、古文は何点、そして漢文は何点配点される……、そういう受けとり方になくなってしまっている……。

#### 「文化の基礎」としての漢文

司会 表現という面ではどうですか。去年の座談会でも、戸川さんが、却って専門外の英文の人なんかから、漢文教育で何故訓読の簡潔で「締った」日本語の表現をきちんと教えないのかと言われる、という話をされて、それが、漢文教育は日本語教育の一環だと言われることのバックにもなっていた訳ですが、今のお話の、たとえば史記の中の人物の生き方にはストレートには自己同一化しないとしても、唐詩とか史記のああいう表現なんかは今の生徒にとってどうなんですか。

野地 それは、彼等も味わっているなあとは言いますよ。これははっきりわかります。ただそれを己れの言語生活の中にどう取り入れていくかってことになる、これはまた別なことになって来てしまつて、まあほとんどないんじゃないかなあ。

金子 僕はねえ。生徒を教えていて、今すぐいい先生だなんて

思ってもらわなくてもいいと思うんです。彼等がある年齢に達して、金子は授業の時こんな事を言ったなあ、ああこれはこうだったんだなあ、と判ってもらえればいいと思うんです。

司会 それは全く同感ですね。

金子 だから、漢文訓読の口調にしても、今教えてる時に直ぐにそれに近いような言葉で文章書くとか、そういう事は、僕、期待しないし、出来ないんじゃないかと思うんです。そういうものを与えておくことによつて、どこかで何かが、やはり少しづつでも、残っていく、或いは生まれて行く、僕はそれしかないんじゃないかと思うんです。だから早急に、止めたから、やつてるからつていう結果は、表面には出て来ないことだろうと思うんですけどね。まあ、あんまり急いでというよりは、やっぱり、今僕等がこれを与えておかなきゃいけないんだ、おいた方がいいんだと思うことを地道に与えていく、それしかないと思うんですよね。あんまり、時代とかねえ、社会の要求に性急に応じようというのは僕はちよつとね……。だから、ある意味では僕は頑固に漢文訓読をさせて、やつてる人間の中から何かが生まれて来てくれればなあ、そう言うよりしよがなと思うんです。では効果はどうだ、というような事はね……。まあ、それは大事な事なんですよけどもねえ。

司会 いま金子さんが言われた、生徒の中に見えない形で残っていくものとか、謡口君が言われた「触媒」とかいюものを私の言葉で言い直せばね、「文化の基礎」ってことじゃないかと思うんです。——また抽象的で中味のないことを言いますけどね——つ

まり、漢文教育は古典教育の一つである。高等学校で教える以上は国語科の一部だという事も疑えない。漢文教育の目的は、そこに限定すべきだろうと去年の座談会で思つたんですね。そこで、その場合の古典教育——言語教育というのと同じ意味で言うんですが——の目的は一言で言つてしまえば、文化の基礎みたいなものを教えていくことなんだろうと思うんです。昔の寺小屋教育には「よみ、かき、そろばん」というものがあつた、そういう共通の文化基盤になるものが、明治以後の近代日本人の中にあるんだろうかという話が、先日ある所で議論をした時に出たんですね。僕も少し前から大学での基礎教育って何だろうということを実際に考え始めていた所だったんで……。つまり、大学も今や専門人養成機関であるよりも国民教育機関だと考えなくては行けなくなっている。そういう場で、国民的教養というか、日本文化の共通の基礎になるようなものを作り出していくのが、大学の一般教育の任務じゃないか、と思つてゐるんです。漢文教育というものも何かそういうものでしょう。それを言語教育(としての古典教育)だと言つた時に、僕らとして最低限押えておきたいことは、戦前の様な漢文や修身による精神教育(人間形成、文明開化のための西洋の科学の成果だけを取りこむ科学教育という二本立て教育は、戦後の段階ですでに、否定されたのだということをしつかり確認しておくことと、その上に、これから新しく、日本文化の共通の基礎になるものを再発見しつつ、作り出していくという、いわば、日本人のアイデンティティの再発見にもつながる、前向きな、未来開拓的な、極めて今日的な課題ととりくむこ



となんだ、ということだと思ふんです。そういう意味で、僕は金子さんの発言に全く賛成なんです。そこで、金子さんの、漢文をちゃんと教えるというのと、加藤さんの国語科の中と言われたのとは違うんですか、違わないんですか。

金子 違わないでしょうね

加藤 ……でしょうね。同じだと思います。

語口 伊藤先生は文化の基礎って事を仰言いましたが、僕も金子先生と同意見なんです。何か一寸違うように受け取られたかも知れないですけどね。そこは同じであって、先程言ったような現実にも或いは生徒の中には浸透し切れないかも知れないけども、やはり文化の基礎として、東洋的な思维の仕方、或いは文学的な感性のあり様を生徒達に向って、訴え統けてゆく、これしかないという風に思ってます。

司会 国民的教養だの文化の基礎だのと言いましたけども、つまり、高校までの段階で、これだけはきちんとしておかなければならぬことが漢文の中にもあるだろうということなんで、それは少くとも国語科という範囲の中で現代国語なり古文などという有機的な繋がりを持っているかということが加藤さんが言われた問題でしょう。

加藤 そうです。

司会 それをもっと掘げて考えれば他教科との関係ということにもなっていくますね。

金子 僕は、にもかかわらずね。やっぱり、国語科なんだけけれどもその一分野としての漢文という分野が厳然としてあるわけな

んで、だから早くその分野に生徒を引っ張り込みたいわけです。漢文を専攻とした人間としてはね——。その手順として、中身のあるものを早くぶっつけて、ある程度の興味関心を持たせると同時に、ある場合には、生徒は何だと思ふこと、すぐには受けつけない思想でも、その中である程度ぶつけていく。そういう授業の流れを考える時に、さっき言ったように従来の教科書の入門編は、非常に限られた時間の中でやらなければならないわけだし、もう一度考え直して行かなきゃいけないことなんじゃないかと思ふんです。

#### それぞれの教室で——実践報告——

司会 ところで、最初に語口さんが出して下さった問題の一つに、国語の中で漢文をどの程度やるかという到達目標の問題があったんですが、皆さんそれぞれの現場で、「俺のところはこの程度までやっている」といった具体的な話を少し出して頂きたいんですが……。そうすると、この雑誌の読者は、色々な学校に勤務しているわけでしょうから、皆さんそれぞれに「それは面白いな」とか「これは俺の所ではとてもやれないな」とか、様々な感想があるんじゃないかと思ふんです。国立では語口さん、どんなことを……。

語口 私の前任者の金子泰三先生は論語の授業では朱注を並記して、読ませていたという話を聞きまして、私は授業ではそこまで出来ませんけども、必修クラブというのがありして、毎週一時間有志の者二十人ぐらいに中華書局本の「史記」を使ってやっています。二、三年生ですけれどもあの位の文章ですと、句読点が

付いているせいかも知れませんがとも三年生の二学期ぐらいになると大体読めるようになりますね。

司会 ということは返り点を付けちゃうわけですか。

謡口 自分で付けられるんです。

司会 教室ではどうなんですか。

謡口 教室は大体教科書に載っている普通の文章でしたら、三分の二ぐらいの生徒は、下の注など見て通釈ぐらいは出来ます。ですからさっきから何度も言っているのは、結局補助的なものを、論語やる場合でしたら、子路のその他の行動とか、関連部分とか、いう風なものを与えて深めていく形を取り入れないと、生徒は通釈或は教科書だけやってるんですしたら多分そっぽを向いてしまうと思うんです。

司会 そっぽを向いてしまうと言うのは……

謡口 もう授業聞かなくても判ってる。説明はいらない、その通釈程度だったらもう自分で出来るってわけです。生徒の中には私の通釈或いは時代背景の説明では合点がいかなかったので、自分で図書館なんか行つて、富山房の本で朱注を較べて読んで始めて納得したというようなことを言っていたのがいました。そういう生徒が毎年何人かは出て来るんですね。

司会 金子先生の所なんかはどの辺を狙つてらっしゃる?

金子 そうですね。今の謡口さんほどはやってないですけどもね。例えば、夏休みの講習なんかですと、送り仮名のない問題集、返り点だけ付いているのを、時間を与えて、送り仮名を自分で考えて、書き下し文にせよといつて、黒板に書かす訳ですが、二、

三時間やった後ですと送り仮名で所々不備はありますけれども、七、八割の生徒は当てられると出て書きますね。授業では大体教科書中心にやって、今年の三年生は、A社の二単位本で、論語には入れなかったんですけど、史記までは、大体生徒に読ませて口語訳させて悪いところを直して、あと中身について少し話して、あと補足。それで、テストやりますと、返り点送り仮名なしで白文で出しますが、それで大体七割から、八割ぐらいでしょうかね、得点は。三十点出すんですけど、大体二十から二十二、三点ぐらいの点数とります。なるべく解釈だけじゃなくて中身をつかまえた様な設問を入れる様に心掛けた問題を作っていて、それでも七割ぐらい取れます。新潟県では一応上の方の生徒だけですけれども、相当にやって来ますね。中には返り点を逆の方に付けたりするものも出ますけどもね。だから僕は形よりも案外中身をね、連中はつかまえていると思うんですよ。

野地 通釈させて、それでよくそこまでいったですねえ。

司会 通釈はある程度、皆スラスラやっちゃう訳ですね。

金子 まあ一応トラ持つてると思うんですよ。でも当てられると結構うまく、こつちがなるほどうまく訳したなっていうような訳も出て来ますよ。

司会 湘南ではどんな具合ですか?

野地 僕はあんまり工夫というのはないなあ。正に、普通の従来のやり方しかしてないんですがねえ。うちは七十分授業で、週一回づつですけども、私の場合全部通釈させることはまずないですねえ。入門の時は、一時間が二時間ぐらいで大体、入門と中

学の復習を一応やります。あとは内容に入っていって、普通の通釈、朗読、それから全員に声を出して読ませたり、それなりの事をやって、あとは補助教材は、さっき申し上げましたように、謄写ファックスの恩恵を被って、色々与えて興味を持たせるというやり方をしています。理科系の生徒は漢文の時間が三年生になると二週間に一遍に減って、七十分授業二週間一遍月に二回しか出来ないの、夏休みに理科系を対象に問題集を一冊やるんです。返り点送り仮名が付いてないと理科系では一寸無理ですから、付いている標準問題集を一冊、なんでも夏休み八日間の講習で午後を利用して飽きるまでやれて言われるものですから、二時間か三時間ぐらひかけて一日五、六題づつ、大体こっちの解説でやる訳です。かなりの生徒が虎の巻を持っているようでどうも訳がうますぎる。「でも汝は吾が故人に非ずや」という所をね、「ブルータスお前もか」と訳したのが一人いましたね。そりゃ虎じゃあないな、って思わず笑っちゃたんですが。思い切った口語訳をさせるとそんなのが稀には出ます。普通は大体そのままやっていましてもう一工夫しなけりやいけないと思うんですけども、実際はテスト問題が共通の問題でやっていますから、自分だけの問題だと、杜甫なら杜甫でかなり時間をとったりも出来るけれど、他の先生と進度を合わせながらやって行きますので、どうしても限界があって、一寸その点が残念だけれども。

謡口 うち各教員でんでんばらばらですから、偏見と独断で出来る訳です。

野地 神奈川県の中にも学校によっては自分の進度に合わせた

テストを作るといふ学校もある様ですけど、私の経験して来た二校とも、全体で進度を合わせて試験は共通問題で、内容は全部の共通している所を出すという形になりますから、生徒は出来ますよ。漢文は五十点満点で出しますけども、多くの場合四十点以上はみんな取っちゃいますねえ。

司会 そうすると漢文担当は必ずしも漢文出身の方ばかりじゃない訳ですね。国語科全員でおやりになる形ですね。加藤さんのところもそうですか。

加藤 そうです、定期テストも全て共通問題です。ですから授業の中で創意工夫しなければ駄目ですね。前の学校でも他の先生と組んで三人ないし四人で同じ学年を持ちましたから、どうしてもある程度共通的な歩調を取らなきゃなりませんので、結局独自性を出すには、副教材をプリントしたりするしかないですね。あとは漢詩の場合中国音で読んでみたりして……。ですから全く漢文の教師だという意識は出て来ない。漢詩を読む時、ああ、漢文の先生ですね、なんて生徒に言われるぐらいです。

野地 入門期の所で江連さんが、プログラム学習というのをやられたでしょう。あれを一度使ったことあります。実際の授業じゃなくて、生徒に持たせて、やれていたんですが……。

加藤 私もそれやりましたけど……。

金子 今、野地さんは入門期に一、二時間かけるって言ったでしょう。僕も大体そうだけど、でも今年うちでは一学期の中間考査終わっても、まだ入門期終わってなかったみたいですよ。

野地 入門期って、どこまでを入門期とされるのか……。

金子 入門篇というのがあつてしよう。

野地 本当の返り点、書き下しだけ。

金子 教科書ですと、[一の所ですね。

野地 僕の言う入門期と少しずれてるんだ。僕は、約束ごとだけを、二時間で済ませるとのこと……。

金子 所謂、訓読上注意すべき文字っていうのがあるでしょう。十七頁ぐらい。これが一学期の中間考査の時まだ終わつてなかつたみたいですね。

加藤 大部細かいですね。

野地 それは丁寧だ。

金子 だからそうやってると、さっきも言つた様にね……。

加藤 飽きちゃいますねえ。

野地 そりゃそうでしょう。テストの問題も出来ないでしょう。

金子 だけどそういうやり方してる学校つて随分あるんじゃないの、実際に。入門期を一、二時間で終わらせて直ぐに、詩なら詩に入れるというのは、やっぱり……。

司会 エリート校？

金子 それと、漢文をある程度きちんとやつた教師でないと不安で出来ないんじゃないか。例えば、漢文を四単位しか取らないで教師になつた場合、そういう人達はやっぱり不安だから前の方からこれは憶えなさいよといった形でついでついで……。

野地 でも現実には中間テストというのは五月末でしょう。それまでの漢文の時間数は四時間ぐらいしかないんですよ。

金子 そうかねえ。だって……。

謡口 連休に絡んだりなんかして、あんまり出来ない。

野地 四時間ぐらいしかないですよ。五十分授業で四時間だとやっぱりその辺だと思いますねえ。

金子 もう少し早く行けないかなあ。

司会 金子先生はいきなり何かやられる訳ですか。

野地 僕はそれ聞きたかつたんだ。

金子 あの、やりますよ。今までは週一時間ありましたからね。今度はもうないでしょ。

司会 金子さんが問題にされるのはむしろ、五十七年度改訂……。

金子 以降のやり方ですね。今すぐく頭にあるのはですね。

司会 そんな入門みたいな事ばかりやってたらそれだけになつてしまふという……。

金子 それだけでも、一学期終わつちゃうんじゃないかと思うんですね。

加藤 私の所が一番国語の力落ちますね。ということとは、まず教科書が読めない生徒がいます。ですから私なんか一時間の授業とにかく読み方に二十分ぐらいかけることがあります。生徒は読むってことを、意外としない。読ませなきゃ読まないんですよ。教科書持つて来て授業で初めて出す、持つて来ない生徒もいるわけですから。そういうことを考えると、私としてはともかく徹底的に言葉として憶えさせることがまず基本ですから、二人づつ交替に読ませて、一人が読んだ後にもう一人それを復唱さ

せるんです——素読のような形で。そうすると意外と真剣になって読むんですよ。そういうことで憶えられるんじゃないかというつもりでやっています。また生徒はノートを取ることもほとんどないです。ですから作文力もありませんのでだんだん文章を書いてしょうがありませんから、詩をやる場合もとかく憶える事が一つです。あと訳詩などを紹介することもあります。思想教材とかある程度長い文章になりますと文章の構造化ってことに一つ眼目を置いてやっていますが、男の子の方が割合に構造化ってことに興味を持ちますね。まず論理的にこういう構造の文章なんだとか、そういうことをやって、その上で中身を考えていこうという段階なものですから。

**野地** 私はノートに教科書の原文を白文で写させることを必ずやらせるんです。

**加藤** 最初やってても途中で飽きちゃうんですね。

**野地** だから、そのノートで読ませる事を時々やるんで、生徒は写して置かないわけにいかない……。古文でも同じことをやらせていますが、白文で二、三行置きに丁寧に書かせまして、あと白文練習板を作らしたり、買って来たりして、これでやることもあります。

**加藤** こっちに根気がないと駄目なんですなあ。

**野地** 白文練習板は、昔は穴を明けたりしたでしょう。最近はお楽に出来るんですよ。透明のビニールを買って来てマジックインキで、線を引きますと教科書とうまい具合に……。

**司会** 白文までおやらせになるんですか。

**野地** はい。

**謡口** うちもやらせます。ノートを、二頁ありますね。それを三段組みにさせて、ちようど各頁を半分づつにさせて、上段に白文で写させてその下に……（中略）それから、たとえば、僕は反切を教えるんですよ。そして定期試験の時に、この反切に合致する音を持つ漢字を捜せっていう問題を出すんです。そうすると非常に興味を持ってやりますね。

**野地** それはやはり自分で独自の試験問題が出せる良さでしょうねえ。

**謡口** ノートも出させるんですが、板書したものは綺麗に整理して、解釈の間違った所は全部直して、それこそ実にキチンとしたのがありましたね、女の子ですけど。……。

**野地** 教科書に出てくる句形の用例なんか、やはり、かなり出されますか。

**金子** 板書ですね。

**野地** ああいうのには興味を示すでしょう。

**金子** 興味示して読もうとする。まあ、投げてしまう生徒もいるけど。

**野地** その用例搜しなんですよ、一つは……。何度も「死馬すら且つこれを買う。」ばかりじゃこつちも良心が咎めるから、生徒にとつて興味のありそうな例文をいろいろ搜すんですけどね……。

**金子** でもこの頃そういう用例集みたいなものは随分出たんでね、ちょこちょこと搜すのには事欠かないけど、それだけじゃ駄

目なんだよね、本当は。前後全部調べた上で引用しないと。

野地 話しが出来ませんものね。だから、指導資料にそういう用例を入れておいてもらいたいと思うんですよ。結局漢文専攻以外の教員にとってはね、そういうものを捜して来ることは大変な努力だから、それをやってくれという要望は、よくあるそうですね。

#### 前号の座談会記事をめぐる

司会 最後にもう一つ、前回の座談会について、皆さん何か、これだけは言っておきたいということがありましたら……。

野地 最後の所に、「長老と若手から小突かれる種は多少出たのではないか」と言われてますけど、僕はあんまりないんだなあ。問題点は出尽してるんだ。「若手」と言っても、僕ら歳取り過ぎてるのかな。何か仰言ることがねえ……。

金子 ごもつともだね。

語口 何にも言えないですね。

野地 だから僕は、金子さんが見えるって聞いたものでね、金子さんはどうとらえるかなと思っていたんですよ。

金子 うーん、僕はね、入門編の考え方、田部井さんが、前々からときどき言ってること、僕は賛成なんだ。

司会 我々、叱られるんじゃないかなって田部井さんなんかと話していたんですが、皆さん大体御意見としては、そんなには違わないということですか？

語口 ええ、漢文教育という形でこれまでされて来た議論についての問題点、考え方の相違点は網羅されていたと思うんです。

ただ私一言、言わせて頂くならば、やっぱり漢文プロパー、漢文をやって来た人間の側の意見というか、何か仲間内だけで、言わずとも理解できるといふ風な形の議論もあったようですよ。だから今日出て来たような、文化の基礎というような、国民全体に共通理解の持てる漢文とは何ぞや、という風なことについての説得力に欠けるという点は若干あった様な気がするんです。一方の意見としては、加藤さんのように、国語の中に吸収してやっていくべきであろうというような意見もあるでしょうし……。僕はこれからはもつと漢文或いは漢字の持つ意味ということを国民に浸透させて行き、高校の現場だけでなく、もつとずっと小さい時から、小・中・高ひいては大学では一体何をやっていくのかというところまで繋げた議論というものが大切だろうと思うんです。

金子 難かしいねえ。(笑)

加藤 そうですねえ。去年の座談会では、言語教育があって始めて人間教育があるというご意見がありましたけど、私もやはり漢文教育は絶対に言語教育から始まらなきゃ、これからはいけないんじゃないか、という風に思っています。

司会 加藤さんが最初に、自分は国語を教えているんで、「漢文教師」という意識は持ちにくい、と言われた言葉の裏には、去年の座談会について語口さんが言われたような、漢文畑の人間の独善とか視野の狭さとか現実認識の欠除とかへのご批判が感じられたんですが、どうですか。さっきの「学校差」って事にもからむでしょうが……。

加藤 僕の学校はまだしも、同級の友達がいつている学校はみ

んなバラバラですから、僕のクラスは漢文学会に対して、ものすごく批判的なんですね。というの、たとえば、今の謡口先生の話を聞いても、結局高校の授業においても大学の授業でやる様なことをやってる訳ですよ。地方ではまず絶対に出来得ない。そういうとおかしいんですけども、時間的な制約とか色々あって……。だから全く面白くなっちゃう訳ですよ。とにかく学会行っても面白くない。学会には行かないでクラス会だけやろうってことに、我々のクラスはなってきたんですけどね。東京では出来るんだとか、そういう意識がある訳ですよ。地方の高校じゃ出来ない。ということは自分は漢文専攻だけでも、とにかく古文もやる現国もやる、すると、どこに一番ウエイトを置くかとなると入試の配点で考える訳ですね。そうすれば現国なら現国に行かざるを得ないんですよ。

謡口 百四十点ね。

野地 現実はどういうことになりますね。

加藤 ですから、どちらもそうですから、どうしても、だからいかにその少い時間の中でいかに効果的に教えて行こうか、そこで悩んでいるんですよ。

司会 僕も昔、高校にいた頃、漢文教育の研究会に出たら、講師にこられた先生が、「近頃、白文も読めない学生がいる……」というような事を言われて、大学の先生っていい気なもんだなあ、高校は白文どころじゃないのに、とあきれたことがあるんですが、その辺の問題は漢文の仲間内だけで考えてるとどうも狭くなって……。

謡口 今伊藤先生が仰言った様な問題はね、例えば、今日話題に出た暗記させる問題とか、読むことから始めるとか、型を憶えさせるとかいう、判り切ってる様なことですけどね、そのことは一体どういうことかという、これを検証し直してね、本当に誰でも扱える、誰でも入って行けるという風にしていくなればもう真剣に考え直して置かないと、本当に、一部の専門の人だけの手仕事という風な形になって来るんじゃないか。

司会 暗記させるという事だったら誰にでも出来る形の一つだけれど、しかし何を暗記させるか、それを暗記させることの意味、それらがはっきりしていなければ、生徒は興味を持って来ないだろうし……。

金子 僕が入門編について内実のあるものというの、その辺とまあ絡む訳ですね。何でもかんでも暗記すればいいという訳にはいかないだろうと思う。

まとめ——二つの方向——

司会 そろそろまとめに入りたいんですが、金子先生の問題は、今まで出たような、教師も漢文出身じゃあない人が持ち、教科書も総合になって、正に国語の一環として扱っていかなきやならないという状況の中で……。

金子 一体どうしていったらいいのか。

司会 そこで、お出しになった問題の一つは、入門のやり方の問題だったわけですね。

金子 それから、まあ、結局指導者の側でどれだけ、教材を掴んで生徒にぶつけていけるか。その力量の問題ということでしょう。

うか。

司会 その辺で今度は、野地さんや語口さんが出された指導書とか教科書とか資料とかいう問題が二番目に大きな問題になって来る訳ですね。

金子 指導書っていろいろは駄目なんですなあ。言っちゃ悪いけど、漢文なんか、まあそれでもいい方なのかも知れないけども。随分変なのがありますものねえ。

野地 大学の先生方が直接お書きになることがありますけども、レベルが非常に高いから、一寸難しいことがよくありますね。

金子 レベルの問題じゃあないんだ。要するに専攻の人がその所書いて下さるんならいいんだが、手を拡げるから、例えばこの個所は三つぐらい解釈可能だっていう時に一つしか書いて下さらんわけですよ。僕等読んで変だと思うから、まあ、色々本ひっくり返すんです、こういう解釈もあつたな、こういう解釈もあつたな。それがないと、ほんとの授業って僕出来なと思うんだな。一つの纏まった文章があると、当然生徒から、「こう取れるんじゃないですか」っていう質問が結構出てくるんです。その対応が出来なきゃなめられちゃいますよ。これが一番あるのは現代国語だと思うんですが、現代国語っていうのは資料がない。それで僕らはどうしているかと言うと、結局現代国語の場合は担当者者が寄って「俺こんとこどうも判らんけども、どう考える」という打ち合わせをやるんです。漢文の場合それがあんまりないんですね。まあ一緒に組んでやっていると「金子こどうなん

だ」って聞きにきてくれる程度で、議論をするまではいかないんです。だからどんだんどんな漢文の、その意味でのレベルは落ちてしまふ。古文なんかだとまだ話合いをしますが、漢文はほとんど話合いがない。だから本当に加藤君が言つたように、国語の中で現国と同じレベルの授業をするっていうのは高等学校なんかでは非常に難かしくなった。難かしくなつて来ているから逆に生徒が離れていく。——他の要素もあるでしょうけどこういうことも言えると思うんです。

司会 問題は、実は教材のレベルダウンや生徒のそれにあるんじゃないくて、教授者の力量という面から教授内容のレベルがどんだんダウンしていくこと、現国や古文の水準についていけなくなっていくところにあるというご指摘は、こりゃ根本的に重大ですね。お話を伺っていると、まず、改訂を前に皆さんかなり危機感を持っていらっしゃるということが言えるようですが、その根本はどうもこの辺にあるのではないか。そしてそれへの対応として、お話の中では二つの方向が出ていたと整理出来るように思いました。一つの方向は、漢文出身でない人でも誰でもが扱えるようにしなければ、という方向。副教材・資料集等々、乃至は指導法の集大成といったものを整備することが我々の責任としてある。もう一つの方向は、漢文が内容的に現国などと同等に知的関心を惹き得るレベルを持たねばならぬという方向。これはつまり、国語の中で漢文が現国と同じレベルで、これだけはやらねばならぬという、僕は、現代日本人の文化の基礎なんていいましたが、その中のいわば漢文の持ち分、それがもう一つきちんと詰



められないと、現状では、今度の改訂は要するに時間数が減ったというだけに終る、或いは「漢文教材はすつとばされる」ことになる可能性がある、ということでしょうか。それに関わってもう一つの大きな話題は学校差の問題……。

金子 いろいろ話を聞くと、一方には非常にレベルが低い所があるわけでしょう。一方では、今日ここに来た人間がたまたまそういう現場にいるせいかも知れないが、ある程度、大学と同じじやあないかと思われるようなことまでやっている所もあるわけだ。その辺は、ここまでは必ずやらねば……とも言えない。そういうような幅というか、不確かな状況が今の漢文教育にはあるんですよね。

司会 そういう学校差の問題については東京都の開発委員会なんかでは、どんな議論があるんですか。

謡口 やはり、まずレベルの低い学校に含わせてという議論が最初に出てまいりますね。ただ教授法とか密度を上げる工夫の仕方といったものを考案する中でレベルをダウンしなくてもやっていく方法を考えていこうじゃないかという線に落ち着く訳ですね。

司会 それはさっきの副教材といった問題ですか。

謡口 そういうことですね。そういう補助資料とかいうふうなもの、準備することによって……。

司会 つまりやれる所はそういうものもやるということですね。

謡口 ええ。

〔この問題については、金子氏が所謂「出来ない」生徒も、実はこちらの視点と指導法次第で、興味や関心も持つし、案外理解力を持っているんじゃないか、実際に扱った事がないから大きな口はきけないが……というようなことを発言されたのが、教育の根本にかかわって示唆的であった。〕(略)

司会 それでは、最後に金子さんに締めくくって頂いて……。

金子 何しろ現場のものだけが集ったものですから、どうも非常に現象的な事が中心の話になってしまった様に思うんですね。でも、現象的な事、実際今悩んでいる事、そういうことの後にはやはり本質的なものがあつての話だったんじゃないかと思うんです。その本質的なことと言うと、この前の座談会で議論されてあつて、今日の話し合いは一応、この前の話し合いを踏まえながら、実際現場に立っている人関の愚痴のこぼし合いみたいな形になつてどうも申し訳けなかったというところですけれども、後ろにはやはり大きいものを控えた上での話し合いだったんじゃないかと、そんな風に思います。もう少し本質論がやればよかったんですけども、愚痴のこぼしあいになりました……。

司会 いえいえ、学校差の中でもっとずっと厳しい状況の現場が沢山あるだろうという事を含めて、今や、漢文教育が大きな曲り角に立たされていることが、私のような門外漢にもよく実感できました。極めて具体的な幾つかの提案・要望・主張も出して頂いたわけで、いずれも直ちに取組まなければならない課題だと思います。学会で真剣に取上げて下さることを切望したいと思います。本当に有難う御座居ました。

(文責 伊藤)